

## 平和のとりでを築く一貧しい子のためにー

(原文)

阿佐美 佳歩 (16 歳)

東京都

昭和女子大学付属昭和高等学校

「もし、あなたの目の前に学校に通えない貧しい子がいたら、あなたはその子のために何をしますか」

当時小学生だった私はその質問に答えることが出来ませんでした。それまで他の国籍の人に会ったことも話したこともなかったため、貧しい子供など本当にいるのかと信じられなかったからです。日本では、いくら貧しくても国の補助や義務教育であるために学校にいけない子はほとんどいないのが現状です。

私が中学生になった時、一冊の本に出会いました。フォトジャーナリストの林典子さんの著書「人間の尊厳ーいま、この世界の片隅でー」です。その本の中には夫に硫酸をかけられた女性、エイズで耳が聞こえない少年、誘拐結婚をせまられた女子大生などけっして裕福とは言えない環境で育つ人々の生活を写真を交えて紹介しています。その本を読んだ時、私と同じ世代の人たちが一生懸命に生きていること、支援団体が協力してもどうにもならない問題があることを知り胸がはりさけそうになりました。そして私は思いました。「この子供達に勉強することの楽しさを教えたい。地球には七十四億人の人が住んでいること、六千八百もの言語があること、たくさんの面白い、新しい発見をしてほしい、この子供達に待つ未来が少しでも明るいものになるように可能性を広げたい。」これが今の私の変えたいことなのだと思えました。でも、高校生の私にできることは無いと思いました。

ある日、私に貧しい子供達のことを教えてくれた本の著者の林典子さんが私の学校で講演をしてくださいました。その時、林さんは「高校生だからと言って可能性を狭めずに、小さい事でも良い。貧しい子がいることを誰かに伝えることや知ることでもチカラになります。だから私と一緒に、自分にできることをみつけていってください。」

とおっしゃいました。小さいことでも良いなら何か身近でできることを探そうと思いました。そして私は、まず家族に話しました。同じ世代の子供達が学校に通えないこと、私たちが普通にできていることができない人がいること。自分でも貧しい国の子供達のことを調べました。一日に一ドル以下で暮らす子供達のこと、人身売買で親に売られてしまう子供達がいること。私は目をおおいたくなるような事実もきちんと全てに目を通しました。欲しい物を我まんして月三千元ユニセフに募金したりユニクロ服のチカラプロジェクトを活用して着なくなった服を寄付しました。小さなことも沢山の人が

行動をおこせば大きく変われます。私は今年、長期の休みを使ってカンボジアに体育を教えるプロジェクトに参加しようと思っています。この目で現地の様子を見ていきたい、勉強の楽しさを直接教えたいです。そしてその子達と将来、一緒に仕事が出来ればそれ以上に嬉しいことは無いです。

「もし、あなたの目の前に学校に通えない貧しい子がいたら、あなたはその子のために何をしますか。」もし今、この質問をされたら私は胸をはって一番に答えます。

「まず私達自身が勉強をし、その子のためにできることを一緒に考えます。欲しいものを我慢して寄付します。小さいことでも皆が行えば大きな原動力になるから。」

皆さんは、貧しい子に何をしますか。見て見ぬふりをせずこの問題に向きあってください。「学校へ行って勉強を試みたかった」そう言って売られる子供をどうか助けてください。子供の夢が叶う未来がはやく来るように一緒に行動しましょう。それが私の今、一番変えたいことです。